

## 創刊から廃刊までを振り返って

小出 展久

一言で言うと残念である。昭和 43 年に北海道立水産孵化場から発行された「魚と水」が 50 年の歴史に幕を下ろそうとしている。前身である「魚と卵」から数えると 68 年という歴史が閉じられる。「魚と卵」は北海道水産孵化場が昭和 25 年に創刊した冊子であり「魚と水」は北海道立水産孵化場と水産庁北海道さけ・ますふ化場に分離した際「魚と卵」から派生した北海道立水産孵化場の冊子である。「魚と卵」は平成 18 年さけ・ます資源管理センターと独立行政法人水産総合研究センターとの統合により終刊となり、これまで北水研が刊行していた研究開発情報誌に統合されることとなる。

今回、これを機に、「魚と水」の長い歴史の変遷をたどってみたい。

ご存じのように、北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場は、北海道廳が明治 21 年(1888 年)、千歳郡烏柵舞村(現千歳市)に千歳中央孵化場を設置したことに始まる。明治 34 年(1901 年)には北海道水産試験場が設置され、千歳中央孵化場は北海道水産試験場千歳分場となる。明治 43 年(1910 年)には北海道水産試験場千歳支場と改称するが、昭和 2 年(1927 年)には北海道水産試験場から分離し、千歳鮭鱒孵化場とし、昭和 9 年(1934 年)には北海道鮭鱒孵化場になる。昭和 11 年には札幌郡豊平町(現札幌市豊平区中の島)に移転、昭和 16 年(1941 年)には北海道水産孵化場と改称、昭和 23 年(1948 年)にはサケ・マス孵化事業が国に移管されるのを機に、昭和 27 年には北海道立水産孵化場と水産庁北海道さけ・ますふ化場に分離する。

幾多の変遷をたどってきた北海道の孵化事業はそれから変遷を続け、現在に至るが、その中で昭和 25 年、「魚と卵」一月号が創刊される(写真 1)。当時、北海道水産孵化場は全道に 6 支場、35 事業場を有し、約 2 億尾の稚魚を放流していた。「魚と卵」は一般向け広報紙と思っていたが、当時の北海道水産孵化場長木村鎚郎氏は「魚と卵」発刊に当たってこう述べている。「(孵化放流の目的の達成のためには) たゆまざる技術の錬磨と、本場各支場事業場間および協力機関との完全なる連絡を必要とする。この意味では本場は最近の學術、技術を要約し紹介、発表すると共に併せて孵化場運営に必要な各種の重要事項の解明連絡に當てるべく本誌を発刊する事となったものである。」つまり、孵化事業を運営するに当たり、この



写真 1 昭和 25 年。「魚と水」の前身である「魚と卵」が創刊される。月刊で表紙は毎月変えられていた。

「魚と卵」は巨大となった組織内で情報共有と本支場間のネットワーク作りが大きな目的でもあったと考えられる。「魚と卵」は B6 版、1 冊 40 頁ほどで 7~8 編の記事が掲載されており、なんと月刊であった。内容は鮭鱒に関するもの、ワカサギ、ウグイ、鯉、ニジマスといった淡水に生息する魚類の情報、スケソヤニシン、黒頭といった鹹水に生息する魚類の情報の他、支場や事業場の紹介や紀行文、論説、解説など、どんなものでもといった風を呈している。

その後、北海道水産孵化場と銘を打った「魚と卵」は年間 12 冊というペースで発行されるが、昭和 27 年には北海道立水産孵化場と水産庁北海道さけ・ますふ化場に分離したため 4 月号の表紙には「北海道さけ・ます孵化場」と「北海道立水産孵化場」が併記されている(写真 2)。この時期、ふたつの機関は独立して発足したものの両施設は併置され、場長は水産庁北海道さけ・ますふ化

場長が併任することとなる。さらに6月号からは編集・運営方針も変わり、編集は両機関でするものの、発行は現在の「(社)北海道さけ・ます増殖事業協会」の前身である「北海道鮭鱒保護協会連合会」が担うこととなる。新たに購読を希望するものには一部50円の代金が課せられた。その後もこの編集・発行体制は続けられるが、昭和28年1月、中の島の本庁舎が焼失するという悲運に見舞われる。資料のほとんどを消失し、復旧と原稿不足からこの年、1月、2月、3月合併号として発行、代金50円の文言は消えていた。続いて4月号、5月号と発行するものの6~9月号は休刊となり、翌昭和29年は1月、2月、3月と発行して28年度を締めくくる。編集者の苦悩が窺われる。

昭和29年度は10月号になって発行されるが、編集後記には「難行を続けながらも漸く本誌の重要性が認められて予算上の見通しがつき、再び皆様の前にお目見えすることになりました。」と書かれており、発行所からは「北海道鮭鱒保護協会連合会」の文字は消え、北海道立水産孵化場のみとなっている。しかし、年が明けた昭和30年1月号は北海道鮭鱒孵化場が発行しており（表紙は北海道さけ・ますふ化場）8月号まで発行されるが、9月号は北海道立水産孵化場の発行となり、この年はこの号が最後となっている。この頃の苦しい状況を90号の編

集後記でこう綴られている。「昭和25年に創刊号を出してから当時の木村場長の努力があって毎月順調に刊行されていったが、昭和28年に不慮の火災のため資料はもちろんのこと、経済的にも行き詰まりとなり、あるときは合併号、又ある時は休刊と、まことに青息吐息の連続であった。しかし、江口弘氏、菊池覚助氏の多大な御援助があって、昭和32年には編集委員会も確立され、経費も国、道の折半として、現在のような装幀に変えられ、隔月刊行で続けられてきたものである。現在では日本国内は勿論、中華民国にも送られて読まれており、諸先輩の努力にはまことに頭の下る思いである。」先達は幾多の困難を乗り越えて「魚と卵」の発刊を続けていた。

北海道さけ・ますふ化場と北海道立水産孵化場との共同発刊となっていた「魚と卵」はこのあと昭和42年まで続くが、昭和40年には北海道立水産孵化場が独自に広報紙、「内水面」を創刊する（写真3）。B5版14Pの小冊子の表紙には「広報」の文字が記され、明らかに外部に対しての発信を意識している。独自の広報紙の発刊を進めたのは後に水産部長となる林和明氏で、「本誌創刊にあたっては、読みやすく、楽しい広報紙を念頭にと…」その意気込みを語っている。創刊号の結びには「広報係」自己紹介として、可香谷政夫、大東信一、田中寿雄各氏の名前が連ねられている。「内水面」は隔月刊で2年間



写真2 昭和27年、組織改編のため表紙には「北海道さけ・ます孵化場」と「北海道立水産孵化場」が併記されている。

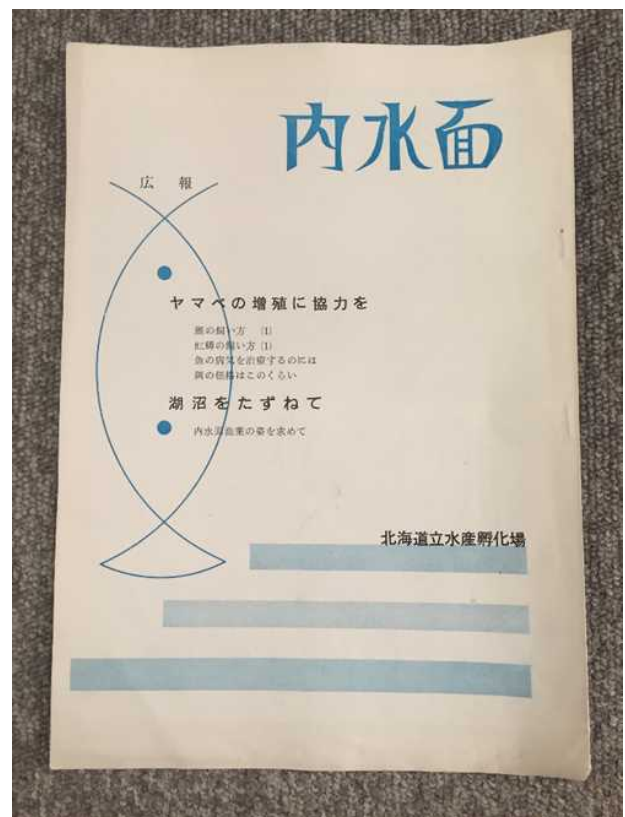


写真3 昭和40年、北海道立水産孵化場が独自に広報誌「内水面」を創刊する。

発行されたが、昭和 42 年 4 月から北海道さけ・ますふ化場と北海道立水産孵化場の併設が解かれ、場長も兼任からそれぞれの機関の長を設けることになったのを機に、北海道立水産孵化場はそれまでの広報紙「内水面」と従来の「魚と卵」を統合して新たに「魚と水」という広報紙を発刊するに至った。ここに、北海道立水産孵化場独自の広報紙「魚と水」の歴史が始まることとなる（ご挨拶の写真 1）。

## 「魚と水」の創刊

創刊号の編集後記には「当時は、昭和 42 年 4 月から、北海道さけますふ化場との併設を解かれ、本道内水面振興の中心機関として出発しました。これを機に、従来の“魚と卵” “内水面”の両広報誌を総合してより充実した豊富な広報誌として「魚と水」をおとどけします。」と記され、「新しい企画を豊富にもりこみ“魚と卵”の好評をくずすことなく、さらに優ぐれたものとすべく努力してゆきますので、ご愛読ください。(K. H)」と結ばれている。K. H とは「魚と水」の発行を精力的に推し進めていた林和明氏のことである。先日、「魚と水」発刊当初のことを伺いたく、数名のふ化場 OB と一席を設けた。北海道さけ・ますふ化場との併設を解かれた初代北海道立水産孵化場長は中山忠衛氏。場長自ら、新生水産孵化場を飾るにふさわしい広報紙の発刊を和明氏に託したそうである。表紙デザインから題字、それぞれの記事の間隙を飾る挿絵などに苦労して発刊にこぎ着けた「魚と水」はこの年、3 号を発行している。発行には苦労したが、気に合った挿絵やレイアウトなどが決まると楽しくなると当時を振り返っておられた。発行は年何回と決まったものではないらしく、昭和 44 年からは第 4 号のみで年 1 回の発行が続くが年 2 回の発行もある。編集は「魚と水」編集委員会がおこなっていたが、林和明氏は昭和 52 年に行政に転出するまで中心的な役割を果たしてきた。

## 異色の記事

昭和 58 年に発行された 21 号には、当時調査研究部魚病科長だった栗倉輝彦氏による「広節烈頭条虫と自体実験」という「魚と水」の中でも異色を放つ記事が掲載された。札幌中央市場から持ち込まれたカラフトマスの標本に多数の条虫のプレルセルコイドが寄生しておりその形態から広節烈頭条虫と同定されたが、正確に判断するには最終宿主に感染させて成虫を得ることが必要だという。ここでいう最終宿主とはまさにヒトであり、これが

できるヒトはまさに栗倉魚病科長本人しかいないのである。魚病、特に寄生虫を研究している方々はこのあたりの話を至極、普通に話される。栗倉氏はカラフトマスから採取された広節烈頭条虫と思われるプレルセルコイド 3 虫体を嚙下し、その後の体調の変化を記録し、22 日後自ら駆虫して成虫を取り出すことに成功する。

飲みに行って話題が寄生虫の話しになると必ずといってこの話を挟まないわけにはいかず、また、飲み屋の親父もこの話をよく知っていて「いるんだよね、ふ化場に、寄生虫、体の中に飼ってる人」と聞かれることもしばしばである。インパクトのある記事であった。

## 「魚と水」を彩った「特集」もの

「魚と水」の発行が続くと内容としてはマンネリが続いてくる。その都度、編集者はいろいろ知恵を絞りますが「特集」ものもそのひとつである。

平成 6 年に発行された 31 号は当時養殖技術部長だった岡田鳳二氏がチームリーダーとなって推し進めた「池産サクラマス回帰率向上試験」の特集を打ちだした。平成 2 年からプロジェクトに種苗生産・特性部会、卵埋没放流部会、春稚魚放流部会、秋放流部会、スモルト放流部会、系群解析部会の 6 部会を設け、それぞれの部会から計 39 編の論文が寄せられた。288 頁、背表紙の厚さが 10mm とそれまでの冊子を 5 冊重ねたくらいの圧巻な仕上がりであった。プロジェクトは継続し、この後の結果については平成 10 年に発行された 35 号で再び「池産サクラマス回帰率向上試験」の特集を組み、新たに組み直された種苗生産・特性部会、生息環境利用部会、放流技術開発部会、放流効果判定部会、系群解析・標識法部会の 5 部会から 43 編の論文が寄せられ、前回以上の 400 頁を超える大特集となった。

この後、平成 16 年に発行された 40 号では札幌で開催された「サクラマスフォーラム 2003—食材としてのサクラマス—」と「サクラマス回帰率安定化試験」を特集として組んでいる。41 号は記念号—北海道立水産孵化場半世紀の歩み—として特集が生まれ、OB の方々に当時の思い出を寄稿して頂き、同時に—北海道の淡水魚—という特集を組み、これまで水産孵化場が扱ってきた淡水魚をそれぞれの研究者に紹介してもらっている。事業・研究の歩み、事業成績書の目次一覧、歴代職員の一覧など半世紀の歴史を綴る記念号となっている。表紙はそれまでの「魚と水」の表紙デザインを小さくあしらい、臍脂色を背景にこれまでとは全く違った装幀となっている

(写真 4)。平成 18 年に発行された 42 号では平成 16 年に実施された大規模な機構改革で生まれ変わった水産孵

化場を特集し、同時にカラフトマス研究の特集も組んでいる。平成 19 年に発行された 43 号ではミニ特集として「ヤツメウナギ」と「サクラマス 0+スモルト生産と放流」が組まれている。続く 44 号でもミニ特集として「尻別川の魚を守る」呼びかけ事業、「石狩川ヤツメ文化保全事業」、「ドジョウ」が組まれている。

### ちょっと変わったシリーズもの

昭和 55 年に発行された 18 号には当時、調査研究部に籍を置いていた今田和史氏が「切手に見られる淡水魚」という記事を投稿している。このシリーズにはファンも多く、19 号では「続 切手に見られる淡水魚」、21 号には「続々 切手に見られる淡水魚」として国内にとどまらず世界の淡水魚の切手を紹介している。このシリーズは 21 号で一旦途切れたものの、24 年を過ぎた 43 号で「切手の中の魚たち」でこの間に収集した切手とそれを取り巻く情勢について 8 頁とカラーの巻頭写真で紹介している。切手に描かれた魚の総説とも言える力作である。今田和史氏はこの年、内水面資源部長を最後に、北海道立水産孵化場を退職された。

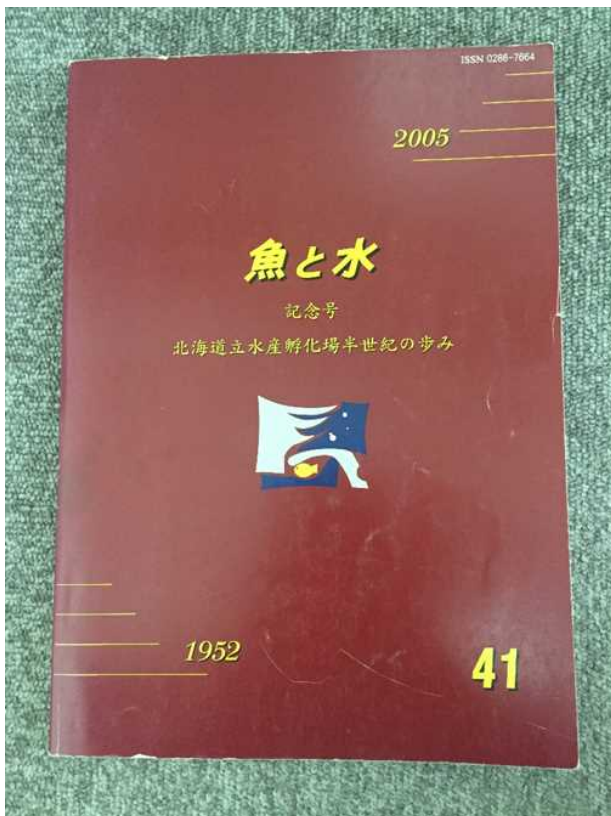


写真 4 平成 17 年に刊行された記念号。平成 16 年におこなわれた大幅な機構改革と、本場の恵庭移転 20 年を記念した。

平成 9 年 34 号には鷹見達也氏が編集担当した「ふ化場便利帳」という記事が掲載された。増殖事業や調査研究でのアイデアは個人レベルでとどまることが多く、なかなか活字になることが多くなかったが、いろいろなアイデアが写真付きで紹介されている。なるほどと感心するアイデアが多いのと、そのアイデアをきちんと活字に残しておくという努力に敬服する。このシリーズは 36 号に第 2 集、40 号に第 3 集が掲載された。「魚と水」の中でも異色のシリーズもので、第 3 集で終わってしまったのが惜しい。34 号で紹介された魚体側定盤 3 種は「測定くん」という愛称で大きく進化を遂げ、我々のサケ、サクラマスの市場調査に大いに役立っている。

### 表紙の変遷と電子化

昭和 42 年に創刊された A5 版の「魚と水」の表紙には誌名よろしく“魚”と“水”とがデザインされており、このデザインは固定されていた。平成 16 年に発行された 40 号で A4 版にリニューアルされたが、林和明氏のデザインによるこのほのぼのとした表紙はこの号が最後となった。37 歳であった。「魚と水」の表紙を変えた理由がよく覚えていないが、平成 16 年にあった大規模な機構改革にあわせ、表紙もそろそろ新しくした方が・・・くらいの話だったような気がする。そんな状況を受けて平成 18 年に発行された 42 号で新たな表紙がお目見えする。表紙デザインは場内で公募され、これに 3 通の応募があり、水産孵化場部長会で選考が行われ決定した。新たな表紙となったのは当時さけます資源部資源管理科長であった佐々木義隆氏のデザインであった（ご挨拶の写真 2）。新たなデザインの「魚と水」はその後 3 年間発行されるが平成 20 年の 45 号からは電子化となりインターネット上で読まれることとなる。電子化に伴い年 1 回の発行は年 4 回となり、新しい情報の迅速な伝達が必須となっていた。広報紙の電子化は時代の流れかもしれない

### 最後に

巨大な組織の情報交換の場であった「魚と卵」は広報の意味合いを持ちながら発刊を続けていた。表紙を何にするか、どんな記事を載せるか、情報の発信として先達の編集者は多大なご苦勞をされていたに違いない。組織が分かれたり、予算がなくなったり、定期的な発刊ができなかったり、それでも発刊し続けたのは発刊しなければならないというどこか使命感にも似た情熱が脈々と流れていたのではないかと推察する。

筆者も「魚と水」の編集委員を経験したことはあるがこの頃は年一回の発刊が定例となっていた。黙っていても原稿は集まらないので巻頭写真から内容からめぼしい職員を見つけては写真の提供や執筆をお願いする。たった年一回の発刊であったが、なかなか大変だったことは記憶に新しい。「魚と水」の電子化に伴い、年4回の発刊に変わった。電子化は印刷、発行、郵送などの煩雑な作業に比べると格段に簡素化され、予算もかからない。より新鮮な情報を新鮮なままに発信できることから年4回の発刊に変わったのではなかったかと思う。しかし、この変更が逆に自らの首を絞めたのではないかとも思案するが「魚と卵」創刊の頃は月刊だったことを考えると年4回で音を上げてもらえない。そもそも、「魚と水」にしても創刊の年は3号が発刊されたが翌年度は2号、その翌年度は1号と発刊もバラバラである。その時々事情によって発行回数も変わっている。発行回数に縛られるより、内水試独自の広報紙である、もっと自由に情報を発信していてもいいのではないだろうか。廃刊という選択肢の他にもう少し知恵を絞る必要があるのではないだろうか。創始者、林和明氏を囲んだ会では、場長に「どうして続けろと言わないのか!」という強硬論も飛び出したり、事情で発行できなくなるのは仕方の無いことかもしれないが、「廃刊ではなく休刊でもよいのでは?」「是非、いつか復刊を」との声が寄せられた(写真5)。「魚と水」、本州にもこの記事を楽しみにしている方たちがいる。地域の人々に、北海道の人々に、国内の人たちに内水試が今何をして何を考えているのか発信することは本来業務であるべきなのでは?先達の発刊し続けなければという熱い情熱が今は失せてしまったとは思いたくないが、創刊50周年を迎えようとする「魚と水」、広報紙としてはまだまだ若いんじゃないの?と思わざるを得ない。

(専門研究員 こいで のぶひさ)



写真5 「魚と水」の創始者、林和明氏を迎えて。  
後列右から、小林美樹、杉若圭一、前列右から  
岡田鳳二、林和明、小出展久(筆者)。